

機関番号:64401

研究種目:基盤研究(C)

研究期間:2007 ~ 2010

課題番号:19520720

研究課題名(和文)

九州とその周辺における島の芸能の研究:開放性・自律性・境界性の中の民俗文化の諸相

研究課題名(英文)

The Folk Performing Arts of Islands around Kyusyu

研究代表者

笹原亮二(SASAHARA RYOJI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号:90290923

研究成果の概要(和文):九州周辺には各地に島嶼が存在する。それらの島嶼は古来、国内外を巡る航路以上に位置し、また、歴史的に中国・朝鮮半島・沖縄(琉球)といった「異国」と接する境界領域に位置したことから、各島嶼の民俗芸能は国内外から政治的・文化的等、様々なかたちで多大なる影響を蒙ってきた。こうしたことは、これらの島嶼の多種多様な民俗芸能の理解にあたっては、それらを、文化的・歴史的・地域的に形作られてきた多様性に富む存在として、それぞれの島嶼の文脈において精確に見ていくことが必要となることを示している。

研究成果の概要(英文): There are a lot of folk performing arts in some islands around Kyushu mainland. The islands were located on the sea route, and between Japan and foreign countries, like China, Korea and Okinawa (Ryukyu). The performing arts were much influenced by that locations. We can find both the same points and different points in those performing arts. It shows that we have to understand the folk performing arts are cultural, historical and regional existence, and research them on each local context carefully. The folk performing arts in some islands around Kyushu mainland are full of variety.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野:民俗学・民俗芸能研究

科研費の分科・細目:文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード:民俗学 民俗芸能研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の研究動向との関係及び位置付け

民俗学において「島」に対する興味関心は古い。柳田国男は早くから島に関心を寄せ、戦前は『海南小記』(1925)・「島の話」(1926)等の著作や離島調査を実施(1925)し、戦後は『島の人生』(1951)・『海上の道』(1961)等を著した。それらを通じ、柳田は、1. 個々の島を孤立した世界ではなく、本州・九州等の主島や他の島々との人・物・情報等の移動を介

した、歴史的と同時に政治的・経済的・文化的な関係において理解を試みた点、2. 日本の歴史や文化を主島側からではなく島々の側から捉えるという視点の転換、3. 島の後進性を島外との関係において歴史的に形成されてきた問題と認識し、その解決を研究の重要な目的とした点といった点を指摘した。それらは、沖縄の島嶼への訪問を通じて「まれびと」・「常世」といった日本人の神観念や他界観を発見した折口信夫、島嶼の調査研究を組織

的に展開した澁澤敬三とアチック・ミュージアム、民俗学を通じて離島の振興施策に積極的に関与していった宮本常一にも受け継がれていった。

その後の民俗学の島に関する研究としては、離島の民俗を古態の遺存として記録・記述した民俗誌的研究(竹田旦『離島の民俗』1968他)、更には生活世界のコスモロジー的研究や風土論的研究において島が地域類型の1つとして論じられた(北見俊夫『日本海島文化の研究』1989他)。これらの研究は、近年の環境民俗学や生態民俗学、地域振興や観光に関わる実践的な民俗学の島嶼に関する研究へと繋がるが、そこでは、それぞれの島を自然環境も含む総体的なまとまりとして捉え、個別に論じる傾向が強い。それは、「島」という環境の過度な強調や、島の民俗を個々の要素に分解しての全国一律な比較といった、それまでの民俗学の研究のあり方に対する反省として一定の意義は認められるが、島の歴史や文化を考える際に不可欠な島外との関係への関心が希薄となりがちで、「島」に関する理解としては些かバランスを欠く。

そこで本研究は、近年に至る民俗学の研究成果を踏まえつつ、島外との関係を重視した柳田の3つの視点の方法論的有効性に改めて着目し、それに依拠することで、外部との関係を重視しつつ、それぞれの島の個別的な状況の精密な捕捉を目指したものであり、その意味で、近年の民俗学の島に関する研究と一線を画すると同時に、それらを補完するものと位置付けることができる。

(2) 着想に至った経緯

研究代表者は、平成15～18年度、基盤研究(C)「南九州・薩南諸島・奄美諸島における琉球系民俗芸能の研究—境界領域における民俗的異文化イメージの形成と伝承—」において、その一環として、南九州(日本)と沖縄の境界領域に位置する薩南・奄美諸島の民俗芸能に関する調査研究を実施した。その結果、この地域の各島の民俗芸能では、系統・系譜的に南九州や沖縄と繋がる一方で、奄美では日本的、薩南では沖縄的形象が「異国」イメージとして趣向に用いられたり、一つの芸能に日本・沖縄両イメージが混在している場合があったり、日本・沖縄双方の影響が錯綜していて、琉球国の支配と薩摩藩の支配の間で翻弄されてきたこの地域の歴史を想起させるものとなっていた。また、奄美群島北部の八月踊のように島嶼内の各島で見られる同種の芸能にも、島毎の違いが明確に認められた。更に、現在、小規模な島では島外から人々を招致することで辛うじて民俗芸能の上演を維持している場合もあり、民俗芸能の上演・伝承が、過疎化・高齢化が進む島のコミュニティの維持・存続と密接に関わっている現状が理解できた。

島の民俗芸能と各々の島の歴史的・政治的・文化的位相との関係、「異国」との境界領域の民俗文化としての民俗芸能の地域間の比較、民俗芸能の伝承と島の地域社会・コミュニティの今日的な状況との関係といった、本研究における基本的な問題設定は、そうした薩南・奄美諸島に関する調査研究の成果を通じて浮上してきたものであり、その意味で、本調査はそれを発展させたものといえる。

2. 研究の目的

九州とその周辺地域には奄美諸島・薩南諸島・五島列島・奄岐・対馬等、多くの島嶼が存在する。これらの島嶼は古来日本国内外を巡る船の航路上に位置し、人・物・情報が頻繁に行き交い、島外との密接な交流・交渉が見られた。反面、島という海に囲まれた地形的制約から、天候等の自然状況や政治的・社会的状況如何で島外と隔絶が生じ易く、一定の自律性が醸成されていった。また、薩南・奄美は沖縄、五島は中国、奄岐・対馬は朝鮮半島というように、歴史的に「異国」と接する境界領域に位置したことから、各島嶼では、その時々日本とそれぞれの「異国」との関係に応じて様々な影響を国内外から蒙り、その結果、島嶼毎に異なる地域的な状況が形成されていった。こうした島に備わる開放性と自律性の併存と、それぞれの境界領域に位置したことに起因する独自の地域性のもとで、それぞれの島の歴史や社会が形成されていったと考えられる。

この地域の島嶼では、奄美の八月踊、薩南諸島の太鼓踊等、それぞれの島嶼毎に特徴的な民俗芸能の分布が認められる。それらは、九州等の島嶼外の地域と共通性を有する一方で、境界外の「異国」イメージが趣向化するなど異なる点も見られる。更に、島嶼内の同系統の民俗芸能でも島毎に差異があり、それぞれの島固有の様相を呈している。こうした共通性と独自性が入り組んだ島の民俗芸能のあり方は、個々の島の開放性と自律性と、島嶼毎の独特の地域性が交錯しつつ展開してきた、この地域の島嶼の歴史的環境との関わりにおいて形成されたことを予想させる。

そこで、本研究では、こうした問題意識に基づき、九州とその周辺地域に位置する島嶼に伝わる民俗芸能について、その実態を明らかにすると共に、それぞれの島嶼の歴史的・文化的位相や地域社会・コミュニティの今日の変容との関連、各島嶼間の民俗芸能を巡る状況の異同にも配慮しつつ検討を行い、島外と交渉・交流してきた開放性・島故の自律性・「異国」に接する境界性の交錯の中で、歴史的に形成され、伝承されてきた島の民俗文化としての、この地域の民俗芸能の様相を解明する。

3. 研究の方法

(1) 文献等の関連資料の調査

本研究の対象地域となる九州とその周辺地域に位置する島々の民俗芸能に関して、論文・調査報告書・地方出版の書籍等の関連文献や映像記録その他の資料を、各地の図書館・博物館・資料館等の関係諸機関において調査・収集する。

(2) 情報収集

本研究の対象地域の民俗芸能について調査研究の実績を有する各地の研究者から、それらの民俗芸能の実態やそれらに関する従来の調査・研究状況に関する情報収集を行う。

(3) 現地調査

本研究の対象地域の民俗芸能について現地調査を実施し、それらの分布・由来・上演の次第・芸態・現代の変容・伝承地の歴史的沿革・関連資料等の各種基礎データを収集する。

(4) 調査成果の検討

本調査・研究で収集した各種資料を集成し、整理・分析を行う。

(5) 報告書作成

本研究の成果をまとめた報告書を作成する。

(6) 重点的な調査研究項目

本調査・研究において重点的な項目となるのは次の諸点である。

- ・五島・壱岐・対馬等、九州と中国・朝鮮半島といった「異国」との境界領域に位置する島嶼の民俗芸能の実態の把握
- ・五島・壱岐・対馬の民俗芸能における九州(日本)側と「異国(中国・朝鮮半島)」側との具体的な関係や双方からの影響、「異国」イメージ的な趣向の有無
- ・境界領域に位置する島嶼として、薩南・奄美の事例と五島・壱岐・対馬の事例の比較
- ・天草等、主に国内航路上に位置した島嶼の民俗芸能の実態の把握と、境界領域の各島嶼の様相との比較
- ・薩南の三島等、小規模な島における民俗芸能の現況と地域社会やコミュニティとの関係

4. 研究成果

(1) 調査の経過

平成 19 年度

・文献調査・情報収集

本調査研究の対象となる九州とその周辺地域の島嶼の民俗芸能に関して、長崎県立図書館・熊本県立図書館・鹿児島県立図書館・長崎文化博物館等の関連諸機関において、論文・調査報告書等の文献や映像その他の先行研究や資料を調査・収集したほか、各地の民

俗芸能の種類・分布・現況等について情報収集を行った。

・現地調査

長島・天草等、一部地域に関してはそれらの地域の民俗芸能や祭礼に関する現地調査を実施し、あわせて文献等の関連資料を収集した。

・調査・研究計画の検討

調査によって収集したデータに基づき、次年度以降の現地調査を中心とした調査・研究計画を策定した。

平成20年度

・現地調査

天草・壱岐・対馬等を中心に、各地の島嶼の民俗芸能や祭礼に関する現地調査を実施した。

・文献調査・情報収集

天草市立中央図書館・天草市立本渡歴史民俗資料館・対馬市立つしま図書館等、現地の関係諸機関を中心に、文献等の各種関連資料を調査・収集した。

平成21年度

下五島・上五島・平戸島・天草・長島等を中心に、各地の島嶼の民俗芸能や祭礼に関する現地調査を実施した。

・文献調査・情報収集

五島市立図書館・新上五島町立図書館・平戸市立図書館・長島町立歴史民俗資料館等、現地の関係諸機関を中心に、文献等の各種関連資料を調査・収集した。

平成 22 年度

・現地調査

下五島・上五島・天草・平戸島・的山大島・壱岐・対馬を中心に、各地の島嶼の民俗芸能や祭礼に関する現地調査を実施した。

・文献調査・情報収集

五島観光資料館・上五島町鯨賓館ミュージアム・的山大島ふるさと資料館・壱岐市立一支国博物館等、現地の関係諸機関を中心に、文献等の各種関連資料を調査・収集した。

・研究成果の整理・検討・取りまとめ

本調査・研究によって得られた各種資料やデータを整理・検討し、それらに基づき、本研究の報告書を作成した。

(2) 各地の島嶼の民俗芸能

・甌島

甌島の各島では武士踊・内侍舞・棒踊・手踊・出羽踊・ヤンハ踊や「トシドン」と呼ばれる仮面行事・十五夜綱引き等が見られた。

甌島の民俗芸能は九州側との関係が密接に認められた。多くの踊り手によって行われる大規模な風流系の行列・踊の芸能である武士踊や、巫女神楽系の芸能である内侍舞の分

布は九州側の旧薩摩藩領と共通するが、九州側よりも一段と古い形式を示していた。一方、神舞や太鼓踊のように、九州側の旧薩摩藩領で多数分布しているが、甌島ではほとんど見られないものもあり、民俗芸能を通じた九州側との関係は総ての面で均質的に関係を有するといった単純なものではないことが見て取れた。

トシドンは甌島独特の年頭の行事であるが、仮面・異形の来訪神の儀礼・芸能として考えると、南九州や薩南・トカラの島々との関係も想定された。

・長島

長島では、種子島踊・鉦踊・棒踊・鳥刺し踊・馬踊・兵六踊・傘踊等の様々な風流踊系統の芸能が見られた。これらの芸能は、かつて不遇の死を遂げた領主の御霊の慰撫のために、その命日に因んだ8月8日に、全島挙げて行われる「お八日踊」として行われている。この日は、島内の各集落が踊り手の組を組織し、島内の領主所縁の神社や寺院その他の場所を終日巡って踊る。その際演じられるのは、昔から伝わっている民俗芸能に留まらず、新しい趣向を凝らした様々な芸能も演じられ、その意味では、お八日踊には新たな趣向を凝らす風流としての芸能の感覚が現在も持続しているといえる。

前述のような民俗芸能は、長島の対岸の出水地方を中心とした九州側と共通するものが多いが、お八日踊という上演の形式は長島以外ではほとんど見られない。また、長島の民俗芸能は、お八日踊以外ではほとんど見られず、芸能上演はお八日踊に集約されてしまった感がある。そうした民俗芸能のあり方も他地域ではあまり見られず注目される。

・天草

天草の大矢野島・天草上島・天草下島では、各地の神社の祭礼の際の神輿を中心とした神幸行列と、それに供奉する様々な芸能の上演が全域的に見られる。神幸行列の際の芸能には、獅子舞・太鼓踊・棒踊・奴踊・神楽・万作踊等があるが、多くの地域で盛んに行われているのは獅子舞・太鼓踊・棒踊である。

獅子舞は、獅子あやしとして唐子が登場したり、胴の幌には毛が付いていたり、囃子に銅鑼が用いられたり、かつてはチャルメラも用いられていたりというように、中国風の獅子舞である点は、長崎くんちの獅子舞と共通する。実際、長崎との関係を伝える獅子舞もある。天草の民俗芸能で長崎との関係ということでは、獅子舞の他にも、御神幸行列に笠鉦が供奉したり、コッコデショや川船といった長崎くんちでお馴染みの出し物が出る祭があったり、ペーロン競漕が行われていたりして、天草と長崎との浅からぬ関係を伝

えている。

太鼓踊は、天草では一つの太鼓を複数の打ち手が踊りながら入れ替わり立ち替わり打つ形式の芸能を指していて、踊り手がそれぞれ腹部に抱えた太鼓を叩きながら踊る形式の旧薩摩藩領の太鼓踊とは、近接する地域ながら明確に一線を画している。

また、神楽は男児・女児による簡素な採物舞が僅かに行われている程度で、分布が希薄であり、九州側の旧薩摩藩領の神舞や熊本地方の球磨神楽の分布地域とは非常に異なる様相を呈している。

天草では虫送りがかつて盛んに行われ、その際に様々な芸能が行われる場合が少なくなかった。虫送りで行われた芸能には、太鼓踊・笹踊・手踊・笠踊等で、太鼓踊は現在も「虫追い踊」として行う地域もある。また、仮面を被ったり異相・異形の風体に仮装して踊ったり太鼓や鉦で囃し立てたりしていた。「通し物」と呼ばれる風流の趣向を凝らした造り物を担ぎ回る場合もあった。通し物は、天草では祇園祭や雨乞い等、虫追い以外の機会でも作られていて、九州側の宇土地方や熊本等の造り物との関係が注目される。

また、天草ではかつて、地区外から訪れる専門芸能者による芸能の上演が盛んであったが、その中でも警女や座頭の芸能が他の地域と比べて遅くまで行われていた。それは、天草には警女や座頭の組織が3組あり、それらが活動を停止したのが昭和になってからと他の地域よりも遅かったことに起因する。彼らは家々をお祓いに歩くだけでなく娯楽性の強い演目も演じていて、地域の人々の芸能に対する要求に幅広く応えていた。

・五島

下五島・上五島の各島や宇久島・小値賀島では、神楽・念仏踊・獅子舞・薙刀踊・地芝居・ニワカ等の芸能が見られる。

神楽は五島神楽と総称されるが、演じられている地域によって、福江神楽・巖立(岐宿)神楽・玉之浦神楽・富江神楽・上五島神楽・有川神楽・小値賀神楽に分かれる。何れも神職と社家によって、それぞれが奉仕する地域内の各神社で専門的に行われる。小値賀神楽は平戸神楽の系統であるが、それ以外は五島神楽として芸態や演目が基本的には共通する部分が多く、同系統の神楽である。これらの神楽は、江戸期には五島藩主との関係が深く、五島家の代替わり等の祝賀や諸祈願の際に藩主家のために演じられ、藩主の厚い庇護を受けてきた。

念仏踊は、盆に各地の人々が腹部の太鼓を叩き、名号由来の詞章を唱え、鉦に合わせて踊るもので、依頼に応じて各家々や墓所等を巡って行われる。旧福江市域の郊外各地の踊り手の組は、現在も市街地に繰り出して家々

や商店等を巡っている。念仏踊は「チャンココ(福江)」「オネオンデ(富江)」「カケ(玉之浦)」「オーモンデー(嵯峨島)」「カンココ(上五島・有川)」等、地域によって呼称は異なるが、基本的な芸能等は共通で同系統の芸能である。江戸期、盆の時期にはいくつかの地域が共同して踊り手の組を組織して福江城下に赴き、五島藩主の御覧に供し、藩主の庇護を受けてきた。

獅子舞は下五島の岐宿・三井楽を中心に盛んに行われていて、正月に各地の人々によって家々を巡って舞われる。獅子舞は祭礼の神幸行列に供奉したり、五島神楽の中でも行われて人気の演目となっている。獅子舞は五島では「シシコマ」という独特の呼称で呼ばれるが、基本的には大神楽系統の二人立の獅子舞で、近接する長崎くんち系の中国風の獅子舞とは全く異なるものである。

上五島ではかつて捕鯨が盛んであったが、それに因んだ「メーザイテン(有川)」が行われている。また、玉之浦神楽の「入鹿高松」は漁村で行われる演目で、イルカの泳ぐ姿を演じているとされ、同様の地域性を反映しているとも考えられる。この島嶼の地域性の反映は、念仏踊の由来にも見ることができる。念仏踊は芸能的には明らかに全国各地で行われている風流踊系統の太鼓踊であるが、腰褌等の扮装や意味不明とされる踊り歌の詞章などから中国等の南方の異国から伝来したともいわれている。

・平戸

平戸島・生月島・的山大島・度島では、平戸神楽・ジャンガラ・須古踊・流儀・蛇踊等の芸能が見られる。

平戸神楽は神職と社家によって各地の神社で専門的に行われる神楽で、平戸藩主の松浦家とも関係が深い。近接する地域の神楽と比較すると、江戸期は同じ平戸藩領であり直接的な交流関係があったとされる壱岐の壱岐神楽と比べて、地理的には近接する五島神楽は、平戸神楽では獅子舞が行われない等、違いが大きい。獅子舞に関しては、神楽に限らず平戸地域では見られない。

一方、ジャンガラは、踊り手が腹部の太鼓を叩き、名号由来の詞章を唱え、鉦に合わせて踊る念仏踊で、五島各地のチャンココ等の念仏踊と基本的には同じ芸能である。ジャンガラは現在平戸島内各地の人々が盆に地域の家々を巡って踊っているが、江戸期には各地区が共同で踊の組を組織して平戸に赴き平戸藩侯の御覧に供していた点も、五島の念仏踊と共通したあり方を認めることができる。

流儀は棒や薙刀等の武具を模した採物を打ち合う演技を披露するもので、的山大島各地等で盛んに行われている。須古踊は平戸

島・生月島・的山大島各地で行われているが、九州側の長崎・佐賀で行われている同名の芸能と同系統の踊である。流儀や須古踊は、平戸藩に奉公していた際に習い覚えた、平戸藩侯から諸道具を下賜されたというように、何れも平戸藩侯との関係を伝えていて、その点では平戸神楽やジャンガラと共通する。

生月島の須古踊では「納戸神」と呼ばれる隠れキリシタンの信仰対象物との関係が見られるが、それは、もともとは九州側から伝わった風流系統の芸能であるにも関わらず、生月島に受容・定着する過程で、「オラショ」が行われているこの地域独特のありようが成立したことを示している。また、生月ハイヤ節や田助ハイヤ節は、全国各地に見られるハイヤ節と共通しながらも捕鯨との関係が認められ、その点も地域性の現れといえる。

・壱岐

壱岐では壱岐神楽の他は、郷ノ浦祇園山笠・芦辺祭囃子・綱引歌(壱岐盆歌)等が僅かに見られるのみである。

壱岐神楽は、神職と社掌によって各神社の祭礼において祭典の一部として行われている。現在は全島内の70社以上で行われていて、10～11月はほぼ毎日のように行われている。壱岐神楽は壱岐の領主との深い関係が認められる。15世紀には当時の領主の波多氏の御前で演じられていた。16世紀以降は壱岐を平戸の松浦氏が領有するようになったが、それ以降も波多氏の時代に倣って、壱岐神楽を壱岐島内だけでなく、平戸に呼んで神楽を演じさせた。その結果、平戸神楽は壱岐神楽から多大な影響を受けるに至った。

明治以降は、陰陽師が演じる「陰陽神楽」や黒住教が演じる「黒住神楽」によって見物人が喜ぶ技巧を尽くした「奉塞神楽」が盛行し、人々の娯楽的な芸能への要望を満たしていた。そうした動向に対して、神道系の演者側は影響を受けて派手な演出が行われるようになる一方で、神道的な整理・統一が図られた。こうした壱岐神楽の様相は、直接的な系譜関係を有する平戸神楽とは異なっている。

郷ノ浦祇園山笠は壱岐の対岸の九州側から伝わったもので、政治的な関係を通じて平戸と関係が生じていた壱岐神楽・平戸神楽とは異なるかたちの地域間の民俗芸能の交流関係のあり方を伝えている。

・対馬

対馬では、民俗芸能は盆踊の他は、命婦舞等が僅かに見られるのみである。

盆踊は、かつては島内ほとんどの地域で行われていた。対馬の盆踊は、他の地区の盆踊のように地区の人々が自由に参加して行われるものとは異なり、演者資格が限定され、年令階梯的に組織された集団によって、地域

の社寺や聖所を巡って行われる儀礼的性格を有している。その一方で、色恋沙汰や仇討ち等の筋を歌い込んだ口説にあわせて踊る娯楽的な演目も併せて演じられる。盆踊は、宗家の盆行事として巖原城下で始まった「御盃蘭塔」と呼ばれる念仏踊や風流行列が始まりともいわれている。

かつて盆踊の際には盆狂言(歌舞伎芝居)が、やはり演者資格が限定され、年令階梯的に組織された演者集団によって盛んに行われていた。島外から役者を師匠として招いたり、道具や台本も各地区で所有していたり、本格的なものであった。明治以降は、福岡から対馬にやって来た浪花節語りを師匠に頼んだり、語り物を頼んだりして芝居を行っていた。

命婦の舞は簡素な巫女舞で、現在は演じられているのは少数の神社に限られるが、江戸期の記録によれば全島で50人以上の命婦がいて、各地で様々な機会に舞われていた。記録によれば、江戸期には獅子舞も行われていたようであるが、現在は行われていない。

対馬は朝鮮半島に近接しているが、盆踊等の芸能において異国的な要素が趣向として演じられることはなく、朝鮮半島との関係は祭礼の由来や御神幸の演出に僅かに見られるのみである。こうした芸能におられる異国・異文化イメージのあり方は、異国的な要素が芸能において様々なかたちで見られた南九州・奄美の島々とは非常に異なっている。

(3) 島嶼の民俗芸能と周辺地域

以上見てきたように、九州周辺の各地の島嶼には、島外各地と系譜・系統的に様々なかたちで結び付きながらも、それぞれの島嶼毎に地域的特色を有する芸能が分布していた。そうした各島嶼の民俗芸能の地域性は、それぞれの島嶼において歴史的に形成されてきた地域社会やコミュニティとしてのあり方々と深く関わっていたが、特に注目すべきは、五島藩・平戸藩・対馬藩といった政治権力との関係、及び漁撈・捕鯨・海運といった経済活動との関係である。今後はそれぞれの地域毎に、民俗芸能とそれらとの関係をより詳細に検討していくことが必要となるであろう。

同時に、それぞれの島嶼の民俗芸能は、島嶼内で分布が完結するのではなく、複数の島嶼や対岸の九州側の沿岸地域も含んで、同系統の民俗芸能が分布する一定の広がりを持つ「領域」を形成していることが見て取れた。従って、今後は、島嶼の民俗芸能を、島と共に海、更には沿岸地域を一体に捉えた「島嶼世界」の民俗芸能として検討を試みることで、より豊かな理解に達することが期待される。

更に、本調査・研究を通じて、各地の島嶼では、近年の過疎化・少子高齢化等の急激な社会変化によって、民俗芸能の上演・伝承が危

機状況に直面している事態を幾度となく目の当たりにしたが、それは、民俗芸能自体の維持・存続に止まらず、芸能が伝わる地域社会やコミュニティ自体の維持・存続が危ぶまれる状況にあることを意味する。島嶼の民俗芸能に対する現地調査や実態の解明は、本州等の主島部の地方の民俗芸能にも増して、一刻を争う緊急性や重要性が認められる。今後はこうした点も留意して、更なる各地の島嶼の民俗芸能の調査・研究が喫緊となってくるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

笹原亮二 2008 「奄美大島の八月踊り」について」笹原亮二編『映像で八月踊りを記録する』国立民族学博物館機関研究プロジェクト「伝統芸能の映像記録の可能性と課題」・同「ユーラシアと日本：交流とイメージ」査読無、pp. 4-13

笹原亮二 2009 「奄美大島の八月踊り」と喜界島の八月踊り」笹原亮二編『喜界島で『奄美大島の八月踊り』を見る』国立民族学博物館機関研究プロジェクト「伝統芸能の映像記録の可能性と課題」・同「ユーラシアと日本：交流とイメージ」査読無、pp. 4-20

笹原亮二 2010 「奄美大島の八月踊り」について」笹原亮二編『鹿児島と奄美で『奄美大島の八月踊り』を見る』国立民族学博物館機関研究プロジェクト「ユーラシアと日本：交流とイメージ」査読無、pp. 4-11

笹原亮二 2009 「伝統芸能は記録できるか?」、沼野充義編『芸術は何を超えていくのか』東信堂、査読無、pp. 26-36

笹原亮二 2009 「民俗学と資料」、笹原亮二編『口頭伝承と文字文化 文字の民俗学 声の歴史学』思文閣出版、査読有、pp. 36-68

笹原亮二 2010 「新芸能論再論—地域の芸能を巡る内なる声と外からの眼差し—」、『国際文化学研究』別冊 III、査読無、pp. 42-54

笹原亮二 2010 「映像取材や番組作りと地域の人々—国立民族学博物館製作長編映像番組「奄美大島の八月踊り」を巡って—」、『人間文化研究における連携構築と社会発信に関する方法論の考究』、査読無、人間文化研究機構 pp. 42-54

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 3 件)

笹原亮二編 2008 『映像で八月踊りを記録する』国立民族学博物館機関研究プロジェクト「伝統芸能の映像記録の可能性と課題」・同

「ユーラシアと日本：交流とイメージ」
笹原亮二編 2009『喜界島で『奄美大島の
八月踊り』を見る』国立民族学博物館機関
研究プロジェクト「伝統芸能の映像記録の可
能性と課題」・同「ユーラシアと日本：交流と
イメージ」

笹原亮二編 2010『鹿児島と奄美で『奄美大
島の八月踊り』を見る』国立民族学博物館機
関研究プロジェクト「ユーラシアと日本：交
流とイメージ」

〔産業財産権〕

○出願状況（計0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹原 亮二 (SASAHARA RYOJI)
国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：90290923

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：